美術科教育学会通信 No.66　2007.10.29.発行

通信事務
〒448-8542　愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢１
愛知教育大学 創造科学系 美術教育講座内 美術科教育学会本部事務局
事務局 E-mail／bikiga@m.auecc.aichi-edu.ac.jp
藤江充(学会代表理事) ー研究室 TEL0566-26-2444
礒部洋司(事務局長)　ー研究室 TEL0566-26-2447
樋口一成(広報担当)　ー研究室 TEL0566-26-2449
〈三重大学〉上山浩（Web 担当）E-mail／ueyama@edu.mie-u.ac.jp

2007 年 第２回 理事会報告

事務局長 礒部洋司(愛知教育大学)

美術科教育学会第２回理事会は、9 月 2 日(日)午後 1 時、名古屋市・栄にある愛知県芸術文化センター12 階の会議室アートスペースDで開催されました。出席者は理事 17 名（欠席 3 名）と宮坂元裕・東山明両監事、事務局・樋口一成の計 20 名でした。会は、冒頭に橋本泰幸前学会代表理事と藤江充新代表理事の挨拶の後、増田金吾副代表理事の進行によって 12 議題の協議と、6 つの報告が行われました。閉会は午後 5 時でした。

以下が議題と報告事項で､括弧内は担当者です。

議題:

１．理事の役割分担確認（藤江充代表理事）

3 月 25 日の第 1 回理事会でほぼ決定していた 20 名の理事の役割分担が、資料により確認された。主な担当は研究部総括・金子一夫副代表理事、事業部総括・岩崎由紀夫副代表理事、総務部総括・増田金吾副代表理事、東地区会総括・宮脇理理事、西地区会総括・花篤實理事、学会誌編集委員長・金子一夫副代表理事などである。

２．学会理事選挙のあり方についての検討依頼（藤江充代表理事）

来年の理事選挙に向けて、会員数のバランスに応じた理事の男女比率制、理事の定年制などについて、選挙管理担当の新井哲夫理事と山田一美理事に検討を依頼することとなった。（3 頁を参照）

３．学会誌委員会の報告と審議（金子一夫副代表理事）

同日午前に行われた学会誌委員会での審議内容が報告され、承認された。

４．学会誌英文版の発行検討依頼（藤江充代表理事）

日本の美術教育の紹介と学会のアピールを兼ねたパンフレットか、ブックレットを InSEA 大阪大会までに作成することとし、岡崎昭夫理事に委託された。

５．機関リポジトリの件（上山浩理事）

許諾の経緯について、上山浩理事から説明があり、今後の対応は同理事に一任された。（10 頁を参照）

６．InSEA 国際会議への協力体制（岩崎由紀夫副代表理事・永守基樹理事・福本謹一理事）

来年（2008 年）8 月 5 日から 9 日に大阪国際交流センターで開催される「第 32 回 InSEA（国際美術教育学会）世界大会 2008 in 大阪」の概要や準備状況に関する説明があり、美術科教育学会が共催団体として支援することを確認した。

７．『学会通信』掲載記事の確認と原稿依頼（事務局広報担当・樋口一成）

美術科教育学会群馬大会の二次案内や InSEA大阪大会への準備状況と参加呼びかけ、東・西地区会活動報告、2006 年度学会賞選考過程報告等、『美術科教育学会通信』No. 66（本号）に掲載する記事の確認と、各関係者への原稿依頼がなされた。

８．全国大会開催時の災害等への対応について（藤江充代表理事）

金沢で開催された第 29 回学会大会初日、3 月 25 日午前に能登半島沖地震が起きたことを受けて、大会当日やその前後に災害が発生した場合の対応について、新井哲夫理事と増田金吾副代表理事が検討、原案を作成することとした。結果は事務局経由で各理事に通知して意見を求め、災害時の対処法を決定することとした。

９．来年度の大会開催について（藤江充代表理事）

来年度の大会について未だ白紙の状況にあることが説明され、開催校、開催時期等について話し合われた。

時期については InSEA 大阪大会にあわせた 8 月開催案も検討されたが、3 月に予定される群馬大会と併せ年 2 回開催となることもあって、例年通り（3 月）とすることに決定した。開催校については佐賀大学が候補に挙がり、宮脇理理事が交渉にあたることとなった。

10．新入会会員の承認（事務局）

理事会までに事務局に到着した本年度分の入会申込書が回覧され、申し込んだ全員が入会を承認された。なお、新入会会員は理事会で正式承認されるが、理事会自体の開催回数が少ないため、入会申込者は学会費の入金が確認された時点で会員としての権利（発表申込など）が行使できることが確認された。

11．海外在住会員の扱い（事務局）

海外在住日本人会員や留学終了後帰国した外国人会員などへの通信送付、学会費徴収などの困難さが指摘され、事業部の永守理事と岩崎理事が検討にあたることとした。

12．その他

退会や会員資格の停止時期、再入会の際のペナルティーなどが話題にのぼった。学会費滞納 3 年目から会員資格を停止し、通信・学会誌を郵送しないこと、単年度でも滞納者は大会発表・学会誌の掲載資格を有しないこと等が確認された。

報告:

１．事務局引き継ぎに関する報告（礒部洋司事務局長）

鳴門教育大学から愛知教育大学への事務局引き継ぎ会を 5 月 12 日(土)午後に、大阪教育大学天王寺キャンパスの岩崎由紀夫研究室で開催したことと、議事内容、会計引き継ぎ状況などについて資料をもとに報告があった。

２．群馬大会の準備状況について（新井哲夫理事）

「第 30 回美術科教育学会群馬大会」開催校、群馬大学の新井理事から資料をもとに説明があった。要綱は別紙の通りである。

３．東西地区会の現状報告と今後の計画等

東地区会（宮脇理理事）

平成 19 年度第 3 回東地区研究会（11 月 10 日開催予定）と東地区会第四回フォーラム（12 月 1 日開催予定）の資料が配布され、山木・山田理事がこれまでの活動と今後の予定等について報告された。（４～５頁を参照）

西地区会（花篤實理事）

担当者が InSEA 国際会議の準備等もあり、具体的な活動は始まっていないが、早急に計画を取りまとめ『美術科教育学会通信 66』（本号）に案内をする旨が報告された。（５頁を参照）

４．各研究会の現状報告と今後の計画等

研究部の金子理事と新井理事から発言があり、東京地区のコアメンバー10 名ほどで授業研究のブックレットを作ろうとしていることなどが報告された。

５．会員消息（事務局広報担当・樋口一成）

資料をもとに学会会員数、学会費納入状況が報告された。ちなみに会員数は、正会員が 589 名（他に賛助会員 4 など）で、会費納入者数が 208 名であった。（いずれも 8 月 10 日現在）

６．その他

代表理事から、入会申込書の様式を変更したい旨の発言があり、生年月日・男女の別などの項目を入れた新しい入会申込書が提示され、了承された。

学会理事選挙の在りかたについて

代表理事　藤江充(愛知教育大学)

第２回理事会の報告にありますように、代表理事として、選挙制度についての検討を理事会に提案しました。提案理由としては、現在の役員選挙制度が発足したのは1991年で今から１７年前になり学会をとりまく状況も変わってきたこと、学会運営へできるだけ多くの会員が参画できること、選挙の投票率を高めることなどがあります。審議の結果、山田一美理事と新井哲夫理事を中心に検討を進めること、次の選挙は2009年度中の実施が予定されるが準備・周知期間も必要であり、今年度中に検討結果を原案として理事会に提案いただくことが了承されました。最終的には学会総会でご承認をいただき決定します。

検討依頼事項の概要は以下のようです。

□学会理事選挙の被選挙人名簿掲載会員に年齢制限を設けることについて（例えば被選挙人名簿作成時に65歳以下とする等）

□学会理事の男女比を会員数の男女比にできるかぎり近づけることについて（学術会議への申請でも役員の男女比を記入する欄があります）

想えば、1991年12月に本学会で初めての役員選挙が実施されたときにも愛知教育大学が本部事務局でした。被選挙人名簿と会員名簿の作成とを同時に進める作業でした。その後、男女比の問題だけでなく、地域別、国公立と私立、大学教員と幼小中学校教員とのバランスをどのようにとるかという議論もあり、いわゆる「補充理事」選考の際にそれらが配慮されてきた経緯もあるようです。しかし、選挙である限り得票数を重視すべきだという意見も否定できません。ただ、配慮すべき要素が多いと制度は複雑になりますので、今回は特に理事の年齢と男女比についてのみ検討いただくことにしました。

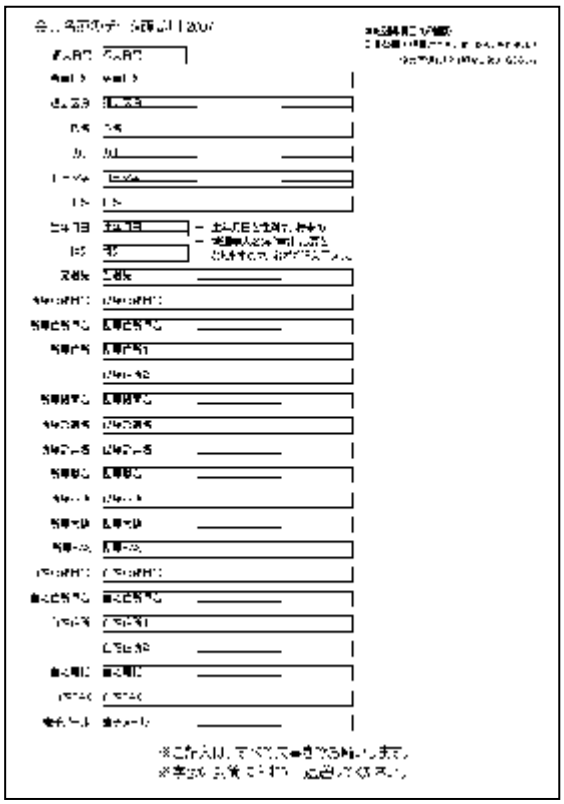
また、新しい選挙制度に対応させるべく会員名簿を整理する必要があります。今回の『通信』と一緒に、あらたに性別、年齢などの確認も含めた書式を同封いたします。もとより、個人情報保護には細心の注意をはらっていきます。お手数をおかけしますが、ご協力をお願いします。

事務局からのお願い　Ⅰ

上記の「学会理事選挙の在りかたについて」にあるような今後の学会の変化に対応するとともに、併せて、現在の会員名簿に不完全な部分もありますので、今後数ヶ月を掛けて、会員名簿を整理していきたいと考えております。

今回郵送させていただいた書類の中に、右のような書類を入れさせていただきました。この書類は、現在学会事務局で把握している各会員の会員名簿の内容です。

お手数をお掛けしますが、この書類に朱書きで修正や追加をしていただき、同封の「学会封筒（長形３号）」に入れて、学会事務局までお送りください。<u>１１月末日必着</u>でお願いします。



報　告

東地区会の報告

■第1回美術科教育学会東地区会シンポジウム

● テーマ「地域の伝統文化と現代美術　～*会津みさと祭り『風と土の芸術祭』関連イベント*～」

● 日時／2007年9月8日（土）14：00～16:00

● 会場／会津美里町役場 本郷庁舎　ふれあいセンター（福島県大沼郡会津美里町）

● 主催／美術科教育学会東地区会

【パネリスト】

川延安直（福島県立博物館学芸員）

西村陽平（美術家、日本女子大学教授）

宮脇理（美術家教育学会理事、元筑波大学教授）

宗像利浩（陶芸家、宗像窯当主）

【企画・司会進行】

渡邊晃一（美術家、福島大学准教授）

本シンポジウムは、会津美里町開催された「Artown（アートタウン） in Misato 2007「風と土の芸術祭」展の関連企画として、学会と福島大学の共催､会津本郷商工会の後援で開催しました。

「風と土の芸術祭」は、会津本郷焼の窯元の方々をはじめ、地元の小・中学校、高等学校の諸先生、大学生、博物館の学芸員の方々と一緒に連携を取り、活動をすすめてきた美術展です。舞台となった旧会津本郷町は、東北最古の焼物の里と言われており、1954年には、日本民藝館館長の柳宗悦をはじめ、河井寛次郎、濱田庄司、バーナード・リーチの来訪を受け、国際的な伝統文化として賞賛されました。本シンポジウムは、このような伝統文化の地域で、現代美術との関わりをキーワードに、今日における「美術」のあり方について話し合いました。参加者５０余名の小規模な会合でしたが、実り多い意見を交わすことができ、充実した時間を過ごすことができました。ご参観下さった方々に感謝申し上げます。

ここに本シンポジウムを、遠路よりご高覧下さった犬童氏から、ご寄稿をいただきましたので、一緒にご紹介いたします。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第1回美術科教育学会東地区会公開シンポジウムを参観して　　熊本県立美術館　犬童昭久

シンポジウムにおける各パネリストによる意見交換は充実した内容でした。

芸術祭企画者の渡辺晃一氏は、地方は住民の流出や少子高齢化などによって過疎化が進み人々の連携意識も薄れるなど、地域のコミュニティが衰退しつつあるといった現況を述べ、そのことを踏まえた上で、ART（アート）は、地域の人々の日常生活と切り離せないものであること、本芸術祭は各々の感性を引き出し影響し合う＜関係づくり＞を目指した取り組みをめざしていることを述べられました。そのことは、町中に「風と土」をテーマにつくられた地元の作家や子どもたちの作品群をみることができ、活動のひとつひとつが多数の協力者がいて初めて可能になったものであることからもその実例の一端を知ることができました。

案　内

東地区会のご案内

■2007年度第３回東地区研究会＜パネルディスカッション at SYABI、Tokyo＞

●テーマ「学校と連携を進める美術館―過去･現在・未来」

●日時／2007年11月10日土曜日
午後１時から午後５時まで

●会場／東京都写真美術館　創作室（アトリエ）
（東京都目黒区三田1-13-3恵比寿ガーデンプレイス内/最寄り駅ＪＲ山手線恵比寿駅）

※詳細は、別紙をご覧ください。

■美術科教育学会東地区研究会フォーラム（平成19年度第4回）／参加自由

●テーマ「教育プログラムと美術教育のこれから
－ワークショップ理論・実践からの提案－

●日時／2007年12月1日土曜日
午後1:30から4:00まで

●会場／東京学芸大学・２０周年記念飯島会館１階
（正門左側）

※詳細は、別紙をご覧ください。

西地区会のご案内

■美術科教育学会西地区会 Workshop 参観&パネルディスカッションin　Naruto

●テーマ「美術館を中核にした地域連携プロジェクトの意義」仮称

●日時／平成19年12月2日（日）
(1)　10:00～15:00　小学生向けWorkshop参観（事前申込者のみ）
(2)　15:00～17:00　研究協議会

●会場／(1)　大塚国際美術館　10:00～12:00 の間正面入り口横にて受付（要：事前申込）
(2)　大塚潮騒荘（美術館正面向側）

※Workshop　小学校中・高学年対象ワークショップ N*CAP（年間4回実施）の第3回

●テーマ「みんなでチャレンジ」

●コーディネーター／藤原伸彦

※詳細は、別紙をご覧ください。

■西地区部会

●テーマ「地域に生きる、地域を生かす美術教育
―奈良県中和地区発　大学と地域学校の連携の新しいあり方をさぐる」

●日時／平成19年12月22日（土）
午後 13時30分～17時00分

●会場／畿央大学
奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-4-2
（近鉄上本町駅から約25分）

※詳細は、別紙をご覧ください。

お知らせ

東地区会のお知らせ

“2008年度”美術科教育学会・「東地区会」の企画をお考えの方は、下記担当理事にお伝え下さい。例年、三件程度の開催を実施しております。

山田一美　Tel&Fax 042-329-7606（東京学芸大学）
直江俊雄　Tel&Fax 029-853-2821 (筑波大学)
宮脇　理　Tel&Fax 042-577-9049

事務局からのお願い　II

◆会費の振込みのお願い

会費の振込みが未だの方は、できるだけ早めに振込みをお願いします。封筒表面にあるラベル上の数字は、10月22日現在の会費未納額です。ご参照ください。

＜ 封筒に貼ってあるラベル（例）＞

〒448-8542
愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢１
美術 教子様
8000

※なお、振込み済み等行き違いの節はご容赦ください。
※会費振込み額についてのお問い合わせは、本部事務局(樋口)までお願いします。
bikiga@m.auecc.aichi-edu.ac.jp

実践紹介

富山大学親子フェスティバルの１０年
～学生･地域･大学のトライアングルバランスを求めて～

竹井　史（富山大学）

はじめに

もの作りワークショップを中核に展開してきた地域活動「富山大学親子フェスティバル」が昨年10 年を向えた。昨年の来場者は開催 2 日間で 15、000 名に上った。対してボランティア学生スタッフは 530 名。おそらく学生たちが自主的に展開する活動としては全国トップに位置するだろう。ここでは、筆者のこれまでの実践を振り返るとともにその活動の内容、方法等について紙面の許す限り述べてみたい。

「先生、初めて子どもらぁと話できたわ」

この 10 年の活動のベースになったのは、前任校で行った「つやま造形塾」という造形活動に特化した活動であった。大学に赴任した 17 年前、教師を目指す学生たちにものづくりの面白さや値打ちを知ってもらいたいと思い、月１回、地元の子ども達を集めてはじめたワークショップがきっかけである。

第１回の活動は、竹を使った玩具作り。終了後、ある学生が駆け寄り、言った言葉がタイトルの言葉である。後日、その趣旨を聞いてみると、合点がいった。子ども達と苦労しながらガリガリ竹を切り、よい香りを嗅ぎ、アイデアについて話していると、子どもと旧知のように対話をしている実感を得たということであった。ものづくりは人と人とをつなぎ、コミュニケーションを深めることを知った。その時以来、私は、実践的研究者として学生や地域に対してどれだけの貢献が出来るかを課題の一つに設定した。

フェスティバルの開始

富山大学赴任時、学生の要望から遊びと造形活動を織り交ぜた月１回の活動を継続したが、大掛かりなものづくりイベントとして、その可能性を追求してみたいという思いもあり、年１回のフェスティバルを計画した。しかし、海のものとも山のものともわからない活動に大学が予算を提供する余裕があるはずもなく、筆者と学生たちから出資金を集めようやく開催した。当初は、学生の意欲をかきたてるような大枠の企画イメージを筆者が提案した後、学生たちと具体的な計画を立てていった。当初は来場者 1、500 名、学生スタッフ 30 名程度の小規模な活動だったが、来場者、参加学生が増えるに従い、学部主催、大学主催へと発展し、運営予算もいくらか出してもらえるようになった。

企画立案に際しての５つの留意点

開催は年１回(２日間)と言えども準備に半年をかけるので長丁場の取り組みになる。２日間の活動のみを見てイベント主義と揶揄する批判はまったく当てはまらない。それゆえ、学生の興味・関

心を如何に持続できるかは重要なファクターになる。企画立案に先立ち留意したのは、図工、美術専門の学生以外に一般学生の参加を想定し、その学生たちがものづくりの世界に興味・関心を持つためにはどのようにすればいいかということ。具体的には、①全身を使い、作る喜びを実感できるようなダイナミックな企画、②造形上の高度なスキルを必要としないが、造形の楽しさを実感できるもの、③学生や子どもの専門領域や日常生活に生じる造形上の興味・関心を造形活動と関連して具体化したもの、④学校現場で展開可能なもの、⑤出来るだけ安価にできるもの、など。

４領域にまたがる造形企画

これまで行ってきた企画は、ものづくり領域、マルチメディア領域、身体運動領域、科学体験領域の４つの領域に分類される。具体的には、ダンボールを使用してつくる巨大迷路、自然材を使った工作ワークショップ、身近な材料を使ったおもちゃづくり、お菓子と粉糖によるアイシングで作る造形企画、自作のデジタルゲームと身体運動を連動した企画､科学ワークショップなど多様にある。学生スタッフたちは自らの関心と専門技術を駆使しながら、企画を実現し、そのプロセスでものづくりとの出会いを深めていく。

企画運営の留意点

学生が取り組みを進めていく際に留意したのは、①活動の全プロセスに参加するということ。企画はもちろん、教材研究、広告料取り、ビラつくりと現場への配布、実施、あとかたづけまでを各自の責任として義務づける。このプロセスで学生の責任感は鍛えられていく。②二つ目には、安全面への配慮。教員を目指す学生に対する基礎的経験としてこの点には細心の注意を払った。たとえば巨大迷路で使用するダンボールはすべてピンを抜き、足元に意図した以外の突起がないように。被り物､ペンダントなどの首からかけるものなどは、出来るだけステープラーを使わず、一定の力が加わればちぎれる、外れるなどの設計に。③３つめには、環境への配慮。材料は出来るだけ日常的な不用材を使用し、使用後はなるべく分別できる設計を考える。また、巨大迷路に使用するダンボールは、粘着性のガムテープを使わず、再利用可能な水ガムテープを使用。

トライアングルバランスということ

このような点に留意しながら、企画を展開するのであるが、来場者、学生スタッフ数を含め、どうしてこのような大規模な企画を運営できるのかと、問われることが多い。この疑問を説明する際に、学生、来場者、大学の三者のニーズとシーズに配慮する「トライアングルバランス」という言葉で説明している。子ども達と関わりたい学生、安全で意義深く、安価な遊び空間を望む保護者や子ども､社会貢献の使命を持つ大学たちのニーズ。興味を持った対象には爆発的なエネルギーを発揮し徹夜をものともしない学生、よいとわかれば大量参加の親子､保護された大学空間などのシーズ。これらのニーズ、シーズを詳細に分析し、造形活動を盛り込んだどのような企画が相応しいかを検討するのである。

美術教育の可能性

教科に限定された美術教育研究は教科教育研究の基礎であることは言うまでもない。しかし、美術教育に含まれる内容は、現代社会に大きなムーブメントをもたらしうる可能性を持った領域である。現代教育において矮小化されつつある本領域に対し、その意義と可能性を提案することは必須の課題であると思う。

（註）

□写真は、体育館を利用して作った超巨大迷路の入り口とお菓子のアトリエ恒例のオブジェ。迷路は、ダンボールを大小 3、000 枚以上使用。中にはダンボールの城、滑り台、回転扉などがある。オブジェは、すべてお菓子と粉糖によるアイシングで作り上げた。

□本取り組みの詳細は、『やる気ひとつで学生は変わる－大学を親子に開放した２日間–』(富山大学出版会より 2007 年 11 月刊)にて述べられる予定である。

実践紹介

地域での教育実践のための取り組み

辻　泰秀（岐阜大学）

美術教育において、子どもたちの創造性や個性を大切にすべきであることは、長年にわたって唱えられてきました。ところが、その方法となると具体的な事例を示す状況にはいたっていないようです。そこで、子どもたち一人一人の思いや表現方法を生かした実践をどのようにしていったらよいか、という課題をもって教育研究に取り組んでいます。さらに、教員養成学部の役割として、子どもと一緒になって描いたりつくったりできる教師や支援者を育てたいと考え、学生を交えて様々な教育実践の機会をつくってきました。

和紙の産地で有名な岐阜県美濃市では、紙による服や帽子・貼り絵・オブジェ・染め等のコーナーを設けて、地域の子どもたちと創作活動をしました。近年は美濃市教育委員会の「子ども創造館」や文部科学省の「子どもの居場所づくり」等の事業を受けて、絵画・木工・陶芸・七宝焼・モザイク・紙工作・レザークラフト等の子ども講座を毎月実施しています。山県市美山でも地域素材である木や竹を活用して１０年余りにわたりワークショップを継続してきました。のこぎりや金づちを使って木や竹で不思議な生き物・ユニークな建物や乗り物・コロコロと動くおもちゃ・楽器等をつくりました。

さらに、岐阜県美術館や美濃加茂市民ミュージアムの教育普及活動にも加わり、子どもたちを対象にした鑑賞教室やワークショップに携わっています。主に６の社会教育施設（公民館）、２の美術館の活動の企画と運営に関係しており、各週末の予定もうまっています。

筆者が附属小・中・高等学校での教職経験があることから、当初は附属学校や協力校において図工・美術科の授業観察をしたり出前授業やティーム･ティーチングを行ったりすることで、大学と教育現場との連携にもとづく実践研究の場をつくろうとしました。学生にとっても子どもたちの実態や教師のはたらきかけについて知るよい機会になっていました。

次第に前記のような生涯教育施設での実践に重点が移っていったのは、学校週５日制の完全実施がきっかけになってます。生涯教育の普及とともに土曜日を含めた学校休業日における子どもたちの過ごし方が社会的に問われてきました。余暇を活用した地域や家庭での体験的な学習を位置づけることが求められているのですが、その教材・カリキュラム・人材については、ほとんど手付かずの状態から始まっていました。幸い教育委員会や関係者の協力を得て、公民館・美術館・統廃合後の学校施設の利用が可能になり、実践の機会に恵まれてきました。そして、学校休業日や放課後における子どもたちの創作活動への公的な予算も、減額傾向にあるとはいえ確保されています。アーティスト･イン･レジデンスの海外アーティストや地域の工芸職人といった多様な人材との出会いもあります。

従来まで美術は個人の表現活動としての性格がありました。けれどもワークショップやコラボレーションという言葉の普及とともに、美術を通して人々が交流をしたり共同で活動をするという考え方が広まっています。学校の教室内で造形活動を行うことに加えて、いろいろな地域や場所に人々が集って美術による交流や協力が進展していくことでしょう。

学校では教科の年間授業計画が予め組まれており、新しく教材を設定することは難しくなっています。普通日に学生や大学教員が教育現場に頻繁に行くことも、時間的に厳しい状態です。ところが、学校休業日における活動では、そのカリキュラムがまだ十分に整っていないこともあって、学生や大学教員が子どもの実態・地域の特色・造形的な魅力をもとにして自在に教材

づくりができる柔軟性があります。土・木・紙・石等の材料とかかわりながら造形活動をすることや、美術館での作品鑑賞やワークショップに対する子どもの意欲は高く、継続して多くの参加者を得ています。

学生スタッフたちは、実践に際して教材や支援の方法を創意工夫しています。子どもたちの造形意欲を引き出すために材料・環境・資料・人材の活用を考えます。切ったり組み合わせたりする材料体験を十分にする、コーナー制やティームティーチングを取り入れることで丁寧な支援をする、といった観点から教材の選択や実践に取り組ります。学校休業日における講座は自由参加なので、教材や活動内容に魅力がないと子どもたちは集まりません。自由裁量が多い分、企画や運営の方法での工夫が必要です。

参加者の人数は実践を評価する目安になります。ただし、それのみで判断することはできません。他の生涯教育の講座の日程・学校行事・先行経験・季節等によって、同じ内容でも参加者の人数は増減します。学校の統廃合による学校施設を利用している場合には、元々子どもがいないので市街と比較することは無理です。一人ひとりの子どもがどのような活動をしたか、スタッフがいかなる支援を試みたのかという質的な面でも実践を評価すべきです。

学生自らティームティーチングをすることは、材料準備・試作・打ち合わせ・会場設営を含めて結構大変です。けれども、子どもたちが夢中になって描いたりつくったりしている姿や個性が発揮されている作品を見ると、苦労が報われ充実感が生じてくるようです。講義や実技に加えて、造形活動を伴う子どもたちとのふれあい交流の経験を積むことによって、学生たちは意欲的になり教師としての実践的指導力を高めていきます。

実践を振り返り次への改善を図るために、ビデオカメラで映像をとったり、子どもたちの反応や学生の感想を文章で記すようにしています。教育実践の場にいると子どもたちの興味の高まりを肌で感じることができますし、スタッフが臨機応変に助言や支援をする場面が出てきます。ただし、こうした実践研究の課題となるのは、子どもたちの生き生きとした雰囲気や熱気を論文として伝える方法が整っていないことです。

ビデオ記録をもとに子どもの様子や先生方の発言や活動を丁寧に再現することによって、実践の記録や報告にはなります。ところが、雰囲気や熱気を伝えようとすると、客観性や分析が弱くなり研究の条件から遠ざかります。子どもの活動やスタッフの支援の記録は、振り返ったり実践内容を伝えるときに重要なのですが、それだけでは研究や理論にはなりにくいように見受けられます。データの分析、仮説の提示と検証、結果からの考察が求められますが、今のところ条件を十分に充たしていません。たとえば、公民館や美術館での活動は、子どもたちが興味をもって活動することが最優先で、研究を前提にしたレポートやアンケートの実施はしにくい状況です。「せっかく休みの日に楽しみに来たのに、評価や宿題があるのだったら次は来ない」というのが子どもたちの対応でしょう。

しかし、どこかでだれかが美術教育の実践を丁寧に記録しておかなければ、近年や現在の美術教育を知ることができないし、蓄積にはなりません。実践の記録や報告は研究論文になりにくいが、美術教育の進展のためには欠くことができないと言い聞かせて、精力的にビデオカメラで映像とったりメモや写真を残すようにしています。

美術史の場合には、著名な作家の作品・経歴・作風・文章が詳細に調査されていて、画集や作家論も数多く公刊されています。先行研究や文献をもとにした研究ができます。それに対して美術教育の実践については、未整理な状態です。教科書は保管されていることがありますが、子どもの作品や実践の記録を見つけることは大変です。学校の場合、作品を子どもが持ち帰りますし、資料も教職員の転勤や校舎の改築の際に多くが散逸しています。それは、明治や大正時代だけでなく、最近でも同様です。小・中学校では校長が３年、教諭が５～７年程で転勤されます。教員委員会や市の職員も３年程です。つまり５～１０年たつと子どもたちも先生方もすっかりいなくなり、その学校の実践を改めて振り返る作業は苦労を伴います。そのため、近年や現在の各地域における子どもたちの造形活動に関するビデオテープ・実践報告・作品等の収集や保管は、美術教育の実践研究をする上で大切になっています。

従来は、大学と教育現場との間にズレがあり、大学の抽象的な理論は現場で役立たない、大学に４年間いても学習指導案すら書けないといった声が教育現場から聞こえてきました。けれども、１０年以上取り組んでいると、大学が多くの実践資料を蓄積している、学生も教材づくりや指導に慣れているといった評価を得るようになってきました。コーディネーター、準備や材料集めのおじさん、指導者、学生のお助け係、カメラマン、研究者といったいろいろな役割をもちながら、引き続き子どもたちの造形活動や鑑賞場面に迫っていこうと考えています。

機関リポジトリについて

事業部担当理事 上山　浩(三重大学)

去る 2007 年 6 月付けで NII（国立情報学研究所）より「NII-ELS コンテンツの機関リポジトリでの利用許諾について（依頼）」という文書が本学会の担当者に届いた。本学会の理事会では、これを受け、電子メールでの審議の結果「無料公開している範囲は認める」旨を回答した。

機関リポジトリ(institutional repository)とは、大学等の研究機関で創出された電子的知的生産物を保存・公開する学術情報アーカイブ(archive)管理システムをさす。ここでいう知的生産物とは、学術雑誌に発表された学術論文をはじめ、プレプリント、科学研究費補助金成果報告書、テクニカルペーパー、学会発表スライド、紀要掲載論文、学位論文、学生向け教材などの多様な電子情報となる。機関リポジトリとは、これらを原則として無料で公開システムでもある。

いわゆる電子図書館等の一般的なアーカイブシステムやデータベースに比較した、機関リポジトリの特徴は、以下の二点に集約される。その一つには、様態がオープンであること、すなわち、特定の ID を必要とせず、当然無償で誰もが利用できることが上げられる。もう一つには、多くの学位論文や研究報告書がそうであるように、学術的価値がありながら広く出版される機会の少ない学術情報を、保存し、かつ、その他の情報にメタデータを添付し、系統的な検索が可能な状態にしていることが上げられる。

この機関リポジトリの発想は、米国にて、'90 年代の初め頃、その議論が始まり、各研究機関にて具体化されていった。我が国でも、'90 年代の終盤には幾つかの大学図書館にてこの発想に拠るデータの蓄積は始められた。そのような中、2006 年 3 月に文部科学省が提示した「学術情報基盤の今後の在り方について（報告）」が契機となり、これは全国的な動勢となった。

現在、各大学の図書館がこの機関リポジトリの構築作業を始めている。そして、その作業には、単に学術情報を電子化するだけでなく、その公開にかかわる著作件使用の許諾が含まれている。冒頭に提示した NII からの許諾依頼は、このような背景による。

周知のように本学会の学会誌「美術教育学」は、全巻が NII-ELS（電子図書館）に収録され、刊行後一年以上経過したバックナンバーはすべて無料公開されている。今回、本学会が許諾したのは、この無料公開分の論文について、各大学の図書館がそれぞれの機関リポジトリへの登録を求めた際に、予め、一括してそれを許可するということに対してである。本学会としては、既に公開している分に関しての機関リポジトリへの登録は問題とはならないと判断した。一方で、これを一括して許諾しない場合は、各大学の図書館が、それぞれの論文を各機関リポジトリへ登録しようとする際に、その都度、学会事務局にその許諾を求めることになり、それへの対応は、本学会の事務作業を大きく圧迫すると考えられる。先の回答の背景には主にこのような理由のあることをご承知いただきたい。

第 30 回美術科教育学会群馬大会（第二次案内）

平成20年3月28日（金）～30日（日）に群馬大学荒牧キャンパスで開催される「第30回美術科教育学会群馬大会」の第二次案内が出来上がりました。「研究発表の申込みに関する書類」や「宿泊に関する書類」も出来上がりましたので、併せてお知らせします。

※詳細は、別紙をご覧ください。

群馬大学(正門付近)

事務局からのお願い III

●会員の消息について

「学会通信６５」を送らせていただいた際の郵便物の中に、住所不明等の理由で事務局に返送されてきたものがありました。会員の資格のある右記の方々の連絡先をご存知の方は、事務局(樋口)までお知らせください。

bikiga@m.auecc.aichi-edu.ac.jp

池川直	今井真理
上埜芳信	大司美智子
岡本康明	近藤亘
佐藤昌彦	下口美帆
諶暁	菅野宜衛
田中陽子	中澤昌代
名達英詔	長谷川賢
三宅香美知	森本昭宏
森優子	山田聖子
山ノ下堅一	

（敬称略）

お詫び

『学会通信６５』の中に下記の誤りがありました。訂正して、お詫び申し上げます。

★１ページ目右側部分

「美術科教育学会」H19 年度役員名簿の枠内

〈誤〉板良敷敏（大阪国際大学・教授）　⇒　〈正〉板良敷敏（関西国際大学・教授）

〈誤〉上山　浩（三重大学・准教授）　⇒　〈正〉上山　浩（三重大学・教授）

〈誤〉仲瀬津久（成徳大学・教授）　⇒　〈正〉仲瀬津久（聖徳大学・教授）

〈誤〉山木朝彦（鳴門教育大学・准教授）　⇒　〈正〉山木朝彦（鳴門教育大学・教授）

〈誤〉東山　明（元神戸大学教授）　⇒　〈正〉東山　明（甲南女子大学教授）

★３ページ目中央部分：

「■投稿予定メイル（メイルを使わない場合は FAX）を７月末日までにお送りください。」の文中

〈誤〉　上から３行目「Fax の場合は 029-228-8329 へ送信下さい。～（中略）～◎本予告を掲載の条件とはいたしません。」

〈正〉　「Fax の場合は 029-228-8329 へ送信下さい。Fax 宛先は大学の事務部総務係ですので、最初に金子一夫宛と明記して下さい。御不明の点はお問い合わせください。◎本予告を掲載の条件とはいたしません。」

※学会 HP には、訂正済みのものを掲載しております。ご確認ください。

〈 http://wwwsoc.nii.ac.jp/aae/Home.html 〉